

闘病の経験 患者に届け

病気を乗り越えて社会復帰した元患者をウェブサイトに「5 Years (ファイブイヤーズ)」で紹介し、患者との交流の場を提供する。そんな支援活動が静かに始まっている。代表の大久保淳一さん(50) ー東京都港区ーは自らもがんを克服した。「経験者の情報に患者と家族は勇気づけられる。ぜひサイトに登録を」と呼び掛ける。(発知恵理子)

交流サイト「5 years」

ファイブイヤーズは、がんなどの患者と家族が抱える悩みや問題を解決するための組織。二月からウェブサイトで活動を始めたばかり。



サロマ湖100キロウルトラマラソンで、両手を上げてゴールする大久保さん。2013年6月、北海道北見市で



がん患者の支援活動に奮闘する大久保淳一さん。東京都内で

い」と感じたことが、きっかけだ。

サイトは患者や家族、病氣経験者、支援者がメンバーとして登録。病歴や治療歴、リハビリや復帰などの情報を書き込み、登録者は閲覧できる。情報は閲覧者を限定した公開や、匿名での表示も可能。Q&A掲示板のほか、直接話したい場合は、複数で同時に話せる会議電話を使った座談会もある。

「患者も家族も不安で孤独。積極的に病氣と向き合うとき、最も力になるのががん経験者が与えてくれる、生きる希望と癒やし、有益な情報です」

大久保さんは2007

がんから再起の大久保代表「生きる希望に」

年、四十二歳で睾丸がんが見つかった。外資系投資銀行に勤め、妻と二人の子どもに恵まれた。百キロマラソンに打ち込むなど「仕事も家庭も趣味も充実していたとき」だった。

手術を受けたが腹部や肺、首にまで転移し、最終ステージと告げられた。病氣や治療の情報を集めようとネットで検索しても「調べれば調べるほど、ネガティブなものばかり。見たるたびに気落ちした」。

三カ月間の抗がん剤治療に二度目の手術、肺線維症も併発。「命と向き合う日々」の中で、がんから再起し、病氣前より好成績を収めたスポーツ選手が存在を知る。「生き延びても、もう人生は下り坂だと思っていた」。その選手に憧れ、支えになった。愛読するランニング雑誌で、マラソンに復帰した乳がん患者の記事も読んだ。「偉大なアスリートじゃなくてもできる」。より親近感を感じ、勇気づけられた。

入院と自宅療養を経て〇九年に職場復帰。肺機能の三分の一を失い、筋肉も衰え、信号が変わるまでに横断歩道を渡りきれない状態だった。ジョギングから再開して練習を重ね、一二年にフルマラソン、翌年はサロマ湖百キロウルトラマラソンを完走した。

その姿がメディアに取り上げられ、「多くのがん患者や家族から励まされた」と連絡をもらった。次第に生かされたという思いが強くなり、ビジネスマンの自分に葛藤を感じるようになった。「この先、仕事でも納得する生き方をして社会に恩返しをしたい」。昨夏に退職し、仲間たちとファイブイヤーズの活動を始めた。

大久保さんは「病氣をしても、人生は終わりではない」「未来はいつだって輝かしい」。自身の体験から生まれた力強いメッセージを伝えていくつもりだ。サイトのアドレスは<https://5years.org>